

【特集】

## IAML アントワープ大会

July 13 - 18, 2014

【目次】

特集 <IAML Antwerp 2014>

IAML アントワープ大会 — グローバルな時代への対応  
を求めて — 荒川恒子 1

カリヨンという楽器とカリヨン文化の紹介  
松江万里子 4

IAML Antwerp 2014  
事務局だより 藤堂雍子 8  
40

### IAML アントワープ大会

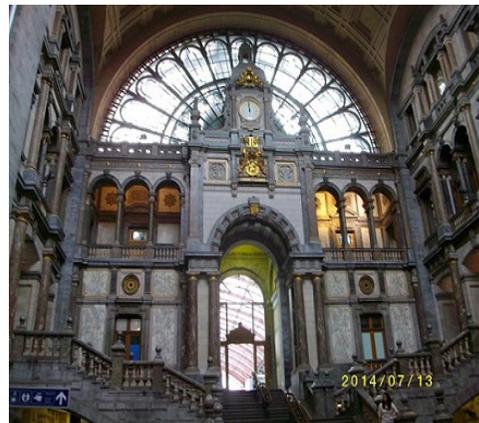
グローバルな時代への対応を求めて

支部長 荒川恒子

本年は7月13日(日)から18日(金)まで、アントワープ王立音楽院で開催されました。日本人の出席者としては、山田晴通さん(6月開催の日本支部例会で話された、ポピュラー音楽系小規模展示施設の日米比較に関して発表)、ベルギー在住で、大会の手伝いやカリヨンに関する発表をされた松江万里子さん(内容は本号でご本人が紹介)、常連の藤堂雍子さん、支部代表の荒川、さらにモントリオール在住の藤永一郎さんのお顔もみえました。

スヘルデ河から北海にでる立地条件の良さにより、16世紀にはすでに隆盛期を迎えた港町ですので、その繁栄の跡は随所にみられます。降り立った中央駅は、19世紀末の建築ながら、

高い丸天井から射す光が美しく、「カテドラル駅」と呼ばれ親しまれています。さっそく目的の音楽院を目指して路面電車に乗ると、すぐにそれと分かる姿で闊歩するユダヤ人達。彼等こそダイヤモンドで巨額な富を得ている商人なのです。音楽院は中間階を持ち、行き止まりの通路等が多くあるために、建物の構造が掴み難いモダンな建築です。なお今のアントワープっ子には「デザイン」「ファッション」は、重要な産業になっているのです。私はオープニング・パーティの会場に使用された「エルゼンフェルト」に宿を取りました。旧市街の入口に位置するこの建物は、13世紀には病院、その後尼僧院、現在ではホテルや集会場に使用されています。そこから聖母大聖堂、ルーベンス画工房までは歩いてすぐです。なお本大会の歓迎の辞の中で、



アントワープ駅

ティルマン・スザートとクリストフェル・ブランタンが紹介されています。ふたり共、16 世紀に大活躍をした出版業者です。特に音楽家にとって重要なのは、作曲・楽譜編集・出版事業を行ったスザートです。となれば 16 世紀にこの地において、チェンバロ製作で名をなしたルッカーズ一族のことも思い出されます。また水曜日に参加したブリュッセルへの小旅行で、図書館、博物館等々の楽譜、著書、莫大な楽器コレクション等を見学しました。たった一週間なのに、約 500 年間位の時空間を行き来し、遺産の保存、継承のやり方等の実地検証に立ち会ったような大会となりました。

さて今回は会長の職務期間、組織構造等の改組がありましたので、その中心課題を数点お伝えしておきましょう。① 会長の任期。バーバラ・マッケンジーさんは、長らく RILM プロジェクトのヘッドとして、その凄腕を発揮しておられます。しかし IAML の役員になったことがありません。まったくの未経験で会長に選出された初めてのケースなのです。ウィーン大会において、対立候補なしでノミネートされましたので、その時点で会長就任はほぼ決定済でした。つまり彼女の場合は、就任するまでに準備期間がありました。しかし今後も未経験のまま会長に選挙されるケース、また会長の身に予期せぬ事態が生じる可能性があります。そこで各支部の人事に影響が及ばず、しかしながら未経験者が会長職をこなせるよう、この役職に対する 6 年の外枠の内、初年は「次期会長」(President-Elect)、2、3、4 年目を「会長」(President)、5、6 年目を「前会長」(Past-President) とすべきという、彼女の意向が受け入れられました。② 組織の構造改革。従来のカウンセル・ミーティングを廃止して、役員会と総会の二部構造とする。決定すべき案件に対しては、大会開催中に 2 回にわけて行われる総会の場で、出席者全員に決定権が与えられます。この改訂の背後には、カウンセル・ミーティングと総会へ



会場となったアントワープ王立音楽院

の出席者が少なく、同じ人が同じ事項を何度も聞かされる、といった悪循環を絶つことがあると思います。しかしイタリア支部等は強い反発を示し、会議は多少紛糾しました。会議に不慣れな方、また語学のハンディの中で、公に発言する勇気の有無等が問われたのです。③ IAML の現状と今後の発展のための、支部代表者会議の設置。従来会議中に開催されていた専門部会討論会に加えて、前もって提出する支部報告に合わせて、会議中に支部代表者会議が開催されます。各支部の事情や要求に対応するために、聴取する機会を増やしたのです。④ 必要に応じての新しい委員会の設置。今回 Advocacy および Membership 委員会が設置されました。なお、経験の少ない参加メンバーに対するケアはすでに始まっています。私はイギリスの若者のメンターとして、お顔合わせと雑談をいたしました。

様々な案件の申し出やその受諾等、また選挙に関わる手続きが、簡略かつ適確であるために、申し出期間や方法に関する規約も変更されました。それらに関しては、必要に応じて日本支部事務局にお問い合わせくださいませ。

発表に関しては、ヨーロッパの大規模なコレクションのデジタル化が一段落したということでしょうか。ここ数年刺激的な内容は少なくなり、開催地ならではの資料の紹介が多くなりました。様々な遺産を持つベルギーですので、劇場や博物館の所有する資料に関わる発表を中心に、出席しま

した。王立モネ劇場の上演曲目、スコア、リブレット、コレオグラフィー、舞台上の指示等のメモがブリュッセル市アーカイヴ(AVS)に残され、目下デジタル化の最中です。また同じく、同劇場が19世紀に使用した、ヴァイオリンを奏する指揮者のパート譜上に見られるバレの動きの指示、バレ・パントマイムの上演に関わる資料等が、ほとんど手付かずの状況で残されています。それらはスキャンされて、アメリカのプリガムヤング大学との提携で研究開始、との興味深い報告がなされました。王立音楽院から切り離され、ブリュッセル市街を見下ろす丘に位置する、楽器博物館の来歴に関する説明、パリのピアノ・メーカー、エラール、プレイエル、ガヴオのアーカイヴのオン・ライン化等も興味深く聞くことができました。ブリュッセルへの小旅行に参加し、現物を目の当たりにし、オン・ラインで情報を得るのは、まさに今日ならではの素晴らしい状況です。しかしそれだからこそ、得られる情報を使つての、新しい研究課題とその成果が待たれます。大会後、参加者に対しなされたアンケートにおいても、図書館員としての新しいスキルの獲得、音楽学上の研究発表を待ち望み、図書館員としての、自らの仕事のモチベーションを上げたく、大会に参加しているとの声が多くありました。

さて上記で各国支部の活動に対する関心の深まりに言及しましたが、本部はグローバル化する世界に呼応して、IAML 活動に広がりを持たせるため、精力を注いでいる昨今です。二年前に個人旅行としてはありますが、事務局長シェクター氏が来日されたのも、そういった脈絡の中で捉える必要があるかもしれません。いつまでたっても、IAML の活動は北米・西欧中心、あるいは他の地域に根差すことができていません。否西欧の国でも RILM、RISM の活動拠点を持っていない国が多いのです。これらのプロジェクトを率いる指導者達は、この面での後進国を訪れ、現地の

図書館員と共にセミナーを開催し、協力を呼び掛けています。R-Project の中心メンバーは、2013年には北京、2014年には南米ハヴァナでラウンド・テーブルを開催しています。RILM はキューバ、台湾、オーストラリア、スウェーデンにも委員会を設立することができました。さらに RILM では <http://rilm.org/submission/index.html> を使用して、著者が直接要旨を編集できるようにしました。言語も英独仏といった言葉ばかりでなく、日本語でも執筆が許されるのです。RISM 活動も、拠点がない国からでも、カリストを用いて情報を提供できるようになっています。

日本支部は設立から35年経ち、メンバー数は団体、個人を合わせて79と、北米・西欧以外の地では最大数を誇ります。今回の開催国ベルギーのメンバー構成は、団体会員28、そして個人会員はわずか5名です。しかし炎天下での会議を支えて、水、アイスクリーム、ビール、いちご、ポン・フリット等々、続々と差し入れをなさり、その気遣いに参加者一同、大喜びの大会でした。規則や会則に従うとか、それらに沿うばかりでなく、現状に処理する、いわゆる臨機応変な能力が問われた大会でした。このような場を若い現役のスタッフの研修の場とすべく、日本からも図書館員を送りだすための工夫を、積極的に考えねばと痛感した次第です。

(あらかわ つねこ)



エルゼンフェルド (オープニング・パーティ会場・宿舎)

## カリヨンという楽器とカリヨン文化の紹介

IAML アントワープ大会での発表を基に

松江 万里子

初めまして。王立カリヨン音楽院ジェフ・デネイン図書室の松江万里子と申します。2014 年 IAML アントワープ大会におきまして、「An “openly hidden” musical instrument: the carillon as a representative musical heritage of the Low Countries, its history, tradition and characteristic features ( “大っぴらに隠れている” 楽器：カリヨン—低地地方を代表する音楽遺産 その歴史、伝統と特徴) という発表をいたしましたところ、日本支部 Newsletter への掲載を、という有り難いお申し出をいただきました。

会議参加者のほとんどの方は、ベルギーがどうい国かも、カリヨンがどういう楽器なのか、恐らくあまりご存知あるまい、という前提で、画像・動画を多用した構成にしました。文章中心でどう再現出来ますか、抄訳的になりますがご容赦ください。

「大っぴらに隠れている」というタイトルを付けたのには、二つの含意があります。誰もが街中の鐘の音楽を、フランドルに特有のサウンドスケープとして認知しているのに、それを「楽器」と意識し、音楽を奏でる装置として耳を傾ける人は、実はかなり少ない、むしろ、楽器とは見做されていない。奏者として見ると、カリヨンがある限り聖堂なり鐘楼なりはそれぞれが楽器なのですが、そうでない圧倒的多数の人々にとっては、歴史的建造物にしか見えない。これが一つ目。

本音楽院が IAML ベルギー支部に機関参加したのは、2013 年と極めて最近です。いろいろ相談に乗っていただいた、王立ブリュッセル・コンサバトリウムの Johan Eekloo 氏から「カリヨン音楽院は、我々からすれば秘密のベールに覆われた存在で、どうやって接触すれば良いか考えあ

ぐねていたから、そちらから出て来てくれたのは嬉しい」と言われたことが、二つ目の含意の背景にあります。こちら側からすれば単なるマンパワー不足で、司書スタッフが存在しないから司書関連の外部機構との窓口も無かった、というだけで、別に隠れていたわけではなかったのですが、外側からは違った見え方をするのだからと改めて感じた次第。

私はかつて司書ではありましたが、シーボルト・コレクション等を対象とする日本資料や漢籍を専門とするものでした。担当者不在で混乱する学院図書室の資料をそのままにしておくのは、元司書としては実にしのびなく、学業の合間に整備を買って出たはみたものの、音楽資料司書としては訓練を受けていないため、分からないことは OJT 的に自習しつつも、迷うことが少なからずありました。さらに、時代の趨勢もあって、出来れば資料はオンライン検索を可能にし、将来的には楽譜のデジタル化、等まで視野に入れて貰えれば助かる、と校長から言われるに至り、これは、専門家組織に参加して情報交換させて貰わないとムリだろう、ということで、上述の Eekloo 氏にコンタクトしたのが 2012 年の秋口でした。

Eekloo 氏が喜んでくださったのにはもう一つ理由がありました。それがアントワープの 2014 年の IAML 国際会議で、フランドルを代表する



アントワープ聖母大聖堂

楽器であるカリヨンが何らかの形で関与出来れば、開催当地の特色を強められる、とお考えだったからです。もちろん、そういった形でイベントに関与するというのは、我々の文化的使命の一環でありますから、我々としても喜んでお手伝いしたいと思いました。

アントワープ聖母大聖堂(前頁写真)は、日本の方々には、『フランダースの犬』の聖地”として知られているのみなのかも、とも思いますが、このカリヨンは、14世紀に既にアーカイブに記述が見え、17世紀にはほぼ現在の形となり、18世紀には当時最も多くのオリジナル曲が作られたという、生ける伝説的存在とも呼べるものです。現在でも、ベルギー国内の他のカリヨンと較べても最も多く生演奏リサイタルを行っていますし、周辺住民やレストランの方々は、自動演奏の故障を誰よりも早く気付いて市当局に連絡してくれる、というぐらいの、世界でも稀なほどコアなカリヨン愛好者の方々に支えられてもいます。

ただ、こちらも本当に偶然だったのですが、IAML会議の直前2週間、同じくアントワープと一部はブリュージュで、WCF(世界カリヨン連盟)の会議が開催される予定になっていました。



<http://www.wcf2014.com/>

毎年行われるIAML会議とは違って、こちらは3年に一度の開催で、しかもフランドルはカリヨン発祥の地。世界中からの参加者(約200名)にとっては、ある意味で聖地巡礼とも呼べる特別な回ですので、主催となるフランドル・カリヨン・ギルドは、持てる力の全てをこの期間に傾注して

いました。その直後となるIAML会期中に、追加リサイタル等をアレンジすることは、既に厳しいというのが判明しました。

私どもカリヨン音楽院の所在地、メヘレン(Mechelen: オランダ語名。フランス語名はマリーヌ(Malines))も、アントワープ州に属しています。地理的にはブリュッセルとアントワープの中間に位置する古都です。ベートーヴェンのお祖父さんが、この街の出身と聞いています。



St Rombouts (Mechelen)

という訳で本音楽院が、IAMLアントワープの共催コンサートを担当する運びとなりました。IAMLに参加して日が浅い状態ではありましたが、世界中からお集まりの皆さんに、この地域に特徴的な「楽器としてのカリヨン」と、この場所に出向かなければ聴くことが出来ず、現存するどんな録音も本来の音を再現出来ていない、という意味で「究極のライブ」とも呼ぶべきカリヨンコンサートを、是非ともちゃんと体験していただきたいと、発表とコンサートが有機的なセットとなるよう心掛けつつ準備しました。

IAML恒例、開催地のテーマ別エクスカージョン日の7月16日(水)、ブリュッセル組、ルーヴァン組が、アントワープの帰路にメヘレンを経由する形で、午後6時半から45分間のコンサートとなりました。

ベルギーの通常の気候と前後数日の状況からすれば、本当に本当に幸いなことにお天気にも恵まれました。遠足日の最後でお疲れの方も多かったかと思いますが、「むしろ最後にのんびり出来

で良かった」とお声掛けをいただけたりもしました。作成していたプログラムが、手違いで配布されなかったため、拡声装置の無い中、声を張り上げて解説文を読ませていただくことになってしまいました。演奏したのはメヘレン市公式カリヨン奏者である Eddy Mariën 氏です。彼は私の先生でもありますので、阿吽の呼吸で乗り切ることが出来た…と思います。プログラム、楽器、奏者の詳細は、後日 IAML のサイトに掲載してもらえました。(http://www.iaml.info/en/node/1136)

英文のみですが、よろしければご参照ください。

なお、このページに掲載されている演奏動画は IAML 本部の Jeniffer Ward 氏がネット上から探し出して貼り付けてくれたもので、当日の演奏ではありません。演奏している楽器も、聖ロンバウツ大聖堂内に 2 組あるカリヨンのうちの「歴史的カリヨン」と呼ばれる、中世音律で調律された鐘と、19 世紀まで使っていたメヘレン式鍵盤を用いたものの方です。当日は、1981 年に建立された、平均律調音の鐘と北ヨーロッパスタンダードの鍵盤から成る「現代カリヨン」が演奏に使われました。

私の発表は、遠足の前日に当たる 7 月 15 日(火)でした。カリヨン・コンサートが組み込まれていない、アントワープ組とゲント組の方々にも、そちらでコンサートはありませんが、もちろんカリヨンはありますよ、しかも歴史的に重要なものばかりですよ、とお伝えしておきたいと考えていました。また、私の前の職場でもあったルーヴァン大学中央図書館には、アメリカから寄贈されたカリヨンがある他に、二つの大戦で二度とも、ドイツ軍から焼き払われた歴史を持つということについて、図書館に携わる者としても、第一次大戦開戦 100 周年である今年ということを考えて併せても、看過すべきではない話題ですので、こちらなるべく写真などを多く入れて紹介いたしました。

W. シヴェルプシュ著、福本義憲訳『図書館炎上：二つの世界大戦とルーヴァン大学図書館』法政大学出版会 1992 (叢書・ユニベルシタス 385)  
<http://www.h-up.com/bd/isbn978-4-588-00385-1.htm>

実はこの書籍、ドイツ語オリジナル版は、もう 15 年以上も絶版状態が続いているのですが、決して読みやすいとは言えない日本語訳版が、今般確認して「在庫あり」状態であったことに、軽く感

動しました。日本語版限定の表紙写真が、第一次大戦後、焼け落ちた図書館跡を歩く当時の皇太子裕仁親王である、ということも、もしかしたらその一因かも知れません。また、この書籍の中では触れられていませんが、ルーヴァン大学図書館へは日本からも寄贈を申し出ていました。ところが東京湾からの出荷直前に関東大震災が発生し、寄贈予定書は全滅。いくら自然災害のためとはいえ、一度申し出たものを取り下げるのでは面子が立たない、と、主に京都の古書店などが総動員で寄贈リストを補填した、という話があります。このあたりの裏話は前職時代に聞きかじったことですが、ベルギーでも知らない人の方が多いので、何か機会を見つけて改めてまとめたいとも思いながらお話ししました。



発表の内容を十全に要約出来ていませんが、紙幅も尽きつつありますので、最後に一つだけ最新の情報を。

2014 年 11 月に発表された『UNESCO 世界無形文化遺産リスト』で「ベルギーのカリヨン文化」が「Best safeguarding practices (ベスト・セーフガーディング・プラクティス)」として顕彰されました。これは、独自の文化を保護しつつ、博物館に陳列・保護するようなものではなく、今も生き続ける動的な文化として更に発展継承させようとしている活動、を指します。

このリストの中には、日本の和紙も含まれているので、日本でも大きく報道されたかと思います。ベルギーでも、カリヨン文化がベスト・セーフガー

ディング・プラクティスに選ばれたことは意義深い、という報道がなされていました。

ベルギー国営フランドル放送局のニュース(オランダ語)

<http://www.unesco.org/culture/ich/index.php?lg=en&pg=00011&Art18=01017>

全リスト(ベスト・セーフガーディング・プラクティスは最下部にあります)

<http://www.unesco.org/culture/ich/en/lists#list>

確かに、フランドル地方のカリオンは、最盛期だった中世から較べると、ナポレオン時代と二つの大戦を経て数こそ半減してしまいましたが、現在は各地で修復などがプロジェクト化され増加傾向にあります。また、カリオンのために書かれるオリジナルの曲目数、カリオンを弾く奏者数、カリオンと他の楽器やパフォーマンスとの共演イベントの開催頻度、等は、過去のどんな時代と較べても現在が圧倒的に多いです。ベスト・セーフガーディング・プラクティスに選ばれる、ということは、UNESCOから「皆さんも、ああいう取り組み方を目指してくださいね」という、モデルケースに指定されたことを意味するので、我々も大変誇らしく、また襟を正して精進しないとね、と感じております。

ちなみに、ベルギーと北フランスの鐘楼群とカリオンは、既に2005年に世界文化遺産に登録されています。<http://www.nhk.or.jp/sekaiisan/card/cards070.html>

ということは、カリオン奏者である我々は、学生も含めて、世界文化遺産を楽器として日常的に演奏使用している、世界無形文化遺産の継承者ということでもあります。こう書くと何かものすごいことのように思いますが、他の楽器を習得するのとあまり違いはないようにも感じます。そのこと自体が、ベスト・セーフガーディング・プラクティスに選ばれた所以、なのかも知れません。建造物が楽器なので、基本的には奏者が楽器に合わせなければならない部分が膨大ですが、それはオルガンとかなり共通すると思います。

楽器としてのカリオン、低地地方の歴史との

関係、カンパノロジーという名のカリオン学、カリオン楽譜や関連資料所蔵の世界的現況、等等、まだまだお伝えしたいことは沢山あります。IAMLを始めとする機会をなるべく多く活用して、継続的に発信していけたらと考えております。

(まつえ まりこ)

#### 【筆者略歴】

早稲田大学教育学部卒、国際基督教大学大学院比較文化研究科博士前期課程修了。

1991年から98年まで、ドイツ日本研究所(東京)研究司書として専門図書館協議会会員。98年からは、ルーヴァン・カトリック大学文学部日本学科専任講師として勤務し、同大学中央図書館東アジア図書室の日本資料選書・NACSIS-CAT(当時)欧州プロジェクトも兼担する。1996年から2003年までは、日本資料専門家欧州協会(EAJRS)の事務局も担当した。

2004年以降、フリーランスの通訳・ジャーナリスト・コーディネーター業の傍ら、王立国際カリオン音楽院ジェフ・デネインに入学、2007年から図書室業務を兼担。IAMLには2013年から機関会員として参加。2014年に同音楽院を卒業、カリオン奏者ディプロマを取得。フランダース・カリオン協会所属、国際文化会館会員。



カリオン・コンサートを聴く大会参加者たち  
(メヘレン・聖ロンパウツ大聖堂)

## IAML Antwerp 2014

藤堂 雍子

アムステルダム・スキポール空港地下駅から、特急タリスで 1 時間足らず、アントワープ地下駅に降り立ったのは 7 月 11 日 (金) 夕刻だった。その朝、成田まで無事辿りつけるかと台風の中を危ぶんだが、便の出発は 2 時間遅れ、そして小雨の中、ほぼ同じ 2 時間遅れで長旅を終えた。カウンスル・ミーティング前の一日半を、時差調整と旧市街散策に充てた。これらは、私の FB をご覧いただければ大方は足りるが<sup>1)</sup>、スヘルデ河に近い楽器博物館 Vleeshuis は見逃せないとお伝えしたい。最新機器が各自渡され、展示物の番号を入力すると楽器の歴史や解説と同時に、その楽器の実演録音を聴くことができる。ブリュッセルの音楽院附属楽器博物館には及ばない規模だが、フォルテピアノなど重要な鍵盤楽器が充実している。またプランタン-モレトウス博物館も必見だ。16 世紀後半に、質量共に優れて国際レベルにあった印刷出版業が営まれていた。これを実証する工房とその出版物や画像を含む周辺資料を観覧できる。中央アジアの複数言語に翻訳された聖書が印刷刊行された事実、館の革張りの壁に施された装飾の精巧緻密な技術、そして楽譜も少なからず印刷発行しており、北方ルネサンスの成果とその普及に貢献したに相違なく、時代の技術の先端を垣間見ることができる。たまたま同行した元会長オランダのセヴェール氏は、何度も観ているがまた来なくなる処だと話してくれた。

オープニング・レセプションは、旧市街の中ほどにあるエルゼンフェルドと云われる元尼僧の病院跡だ。中庭の白い彫像が、ここの歴史を映し取ったような閑静で美しい佇まいの館で催された。ブリュッセルの王立図書館に永く務め、研究者としても知られる B. ヒューイ

氏の名が冠せられ、当のご本人が夫妻で参加された。ご挨拶すると「ムライ夫人は元気ですか？」としっかり名指しでお尋ね下さり、少しも変わらない氏の記憶力と矍鑠とした様子に胸を突かれた。

オープニング・セッションでは、「ベルギーの音楽：遺産と未来に向けて考える」と銘打ちアントワープのラジオ TV の元プロデューサー氏が、歴史に沿った分析を試み、ねじれた文化の諸相を開示しながら、カタロニアや、ケベックの在り様とも異なり、固有の体系を持ってはいない、と述べていた。アントワープ大学図書館からは、情報技術者育成と歴史的研究に資する蔵書構築に力点が置かれていることが強調された。来年あたりコンサートでお目見えする予定のネオスコア (デジタルでシート楽譜をモニター画面で実用に供する) の方式なども紹介された。

プログラム委員会が設けたセッションでは、「ブリュッセルの王立モネ劇場のコレクション：オペラハウスの社交文化の反映」が取り上げられた。1700 年に創設され、多くのオペラや、バレエ、演劇などが初演されていることでも知られている。D. ディの所属する (米国ユタ州、プリガムヤング大学) 図書館では、このモネ劇場アーカイブの一部をデジタル化し公開している。ブリュッセルの王立総合アーカイブからは、その維持管理についてあまりにも旧式なので、この IAML 会議を契機に新規登録を進め、目録記載方法についても新たに見直していることが報告された。ブリュッセル自由大学の P. レブッラは、18 世紀後半から 19 世紀の前半、すなわちフランス革命前夜からベルギーが独立国家として成立するころまでの動乱期に、このモネ劇場が近隣大国の政治や文化交流の拠点でもあったことに言及した。「音楽革命」とすら云われるベルギーの独立は、周辺五大国の交戦と和解の果て、モネ劇場でのオペラ公演 (Fr. Auber 作品、パリで繁く再演) が一つの契機を作ったとも云われている。大野和士氏が数年前まで音楽監督であったが、P. レブッラのごく最近の報によれば、目下、財政困窮に立たされている。

研究図書館部会のセッション「対立と文化：図書館におけるコレクション研究」では、アントワープ音楽院とブリュッセルの王立図書館から当時のコレクションについて報告され、詳細はレジュメやpdf<sup>2a)</sup>でも公開されているので参照されたい。今年は第一次大戦から100年の記念年なので、エクスカションで出かけたルーヴァンでは、カトリック大学図書館のみならず、街の中心が、ドイツ軍によって崩壊され、後に米国が大学図書館を再建し、日本資料室蔵書の多くが、昭和天皇によって寄贈されている史実も紹介された。何より街中や大学図書館内の写真による多くの大型パネルで、大国とは言えない規模のベルギーがいつも戦場となっていた現実を物語っていた。そして多民族難民が逃げ込むことのできる場所でもあった。一方では、街に入る前に訪れたルーヴァン郊外の僧院跡では、聖歌の研修施設として現代と過去を繋ぐ機能を備え、訪れた我々を歓待し、素晴らしい聖歌を聴くこともできた。街中では醸造したばかりのビールを味わう機会もあった。帰途、ベートーヴェンの祖父が音楽家として居たこともある古都メヘレンに立ち寄り、大教会前の芝生に腰を下ろして、カリヨンを聴くコンサートも設けられていた。解説は、他ならぬ松江万里子氏であった (pp.4-8 参照)。当地のカリヨン養成学校では、オルガンや古楽を学びながら取得するアメリカ、日本からの留学生が多いと聞く。

書誌委員会のセッションでは、ワロン圏(フランス語圏)を出自とする音楽家たち、「フランス音楽の父」と称されたC. フランク(リエージュ生まれ、フランスに帰化した、ゲルマンの血も母方から継いでいる)、Fr. J. フェティス(大部な人名辞典編纂、作曲家)、H. ヴュータン(ヴァイオリン奏者。弦に限らず多作の作曲家で教育指導にも貢献、ヴァニアフスキを育成)や、E. イザーイ、G. ルクー(フランクに師事するも早逝)らの資料について、ブリュッセル、リエージュ、モンスの王立音楽院図書館から報告された。後にメーテルランクやCh. v. レルベルクなど、若き象徴派のベルギーの詩人たちの作品をいち

早くテキストに取り上げたドビュッシー(ベレアス)やフォーレの歌曲(イヴの歌)が、新しくフランス音楽の自立とさらなる成熟へと道を開いていくことにも繋がっていくのだ。

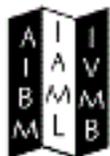
目録委員会 RDA のワーキング・ミーティングには、フランスの現代音楽センター(Cdmc)や、ドイツ国立図書館の進展に加え、イタリアも参加の構え、日本では、2013年トッカータ社がセミナーを開き先鞭をつけ、いくつかの音楽資料を扱う図書館から業務委託を受けていることも非公式に伝えた。AACR3版があるわけではなく、多言語に加え多様なメディアや電子資料にも対応できる目録の機能要件(FRBR)が求められる時代、環境にあることは、もはや否定できない。2009年国際目録原則覚書(ICP)に基づくVIAF(Virtual International Author File)の進展も期待されているところだ。また、OCLCのJ. ワイツ氏が、米国の目録概況を報告することが、この数年定例化し、IAML HPで、これらを読むことができる<sup>2b)</sup>。

会期中には、新たにMembershipやAdvocacyに関する委員会が設けられ、専門者機関としてのCode of conduct(行動規範草案)も示されている。一方では、IAMLの有力中堅メンバーが参与する外郭では、Digital Libraries for Musicology Workshopの集まりがロンドンで(14年9月)、またThe music encoding conferenceがフィレンツェで催される(15年5月)予定も報じられてもいる。ニューヨークでの2015年コンGRESは、既報の通りだが、より広範囲な人文学と音楽学の実用的デジタル環境を構築しようとする動きが起こっていることにも注目したい。

(とうどう やすこ)

註

1. [https://www.facebook.com/yasuko.todo.9?ref=tn\\_tnmn](https://www.facebook.com/yasuko.todo.9?ref=tn_tnmn)
- 2a. [http://www.iaml.info/files/annual\\_conferences/lemmers\\_royal\\_library\\_first\\_world\\_war.pdf](http://www.iaml.info/files/annual_conferences/lemmers_royal_library_first_world_war.pdf)
- 2b. [http://www.iaml.info/files/annual\\_conferences/](http://www.iaml.info/files/annual_conferences/)



## 事務局だより



## 第 57 回研究例会「公共図書館と音楽」

昨年 11 月 29 日に開催された第 57 回研究例会「公共図書館と音楽」はおおよそ 40 名の参加者を迎え、好評のうちに終了した。公共図書館に関するテーマは今回初めて採り上げられた。昨年度総会に提出された「現職の図書館員を引き付けるような企画を」という意見に応えたものでもある。参加者のうちには、非会員の公共図書館や音楽関係企業関係者が多く見られ、この分野への関心の高さをうかがわせた。開催にあたり、準備段階から株式会社トッカータの御協力をいただいた。御礼申し上げます。(会場・東京音楽大学附属図書館)

## ニューヨーク国際大会

本年度の IAML 国際大会は 6 月 21 日(日)より 26 日(金)の期間、ニューヨークのジュリアード音楽院で開催される。国際音楽学会(IMS)との合同開催で、総合テーマは「デジタル時代における音楽研究 Music Research in the Digital Age」。

今回のプログラムでは東アジアからの報告が目立つ。大会 4 日目には「東アジア」のセッションが設けられ、中国と台湾からそれぞれ報告がなされるが、そのほか個々の発表に韓国も加わる。カナダ在住の藤永一郎氏 "Digital prosopography of Renaissance musicians" は、22 日「ルネサンス研究」のセッションで。残念ながら日本からの報告は今回はない。詳細は下記 URL まで。

[http://www.iaml.info/files/annual\\_conferences/2015-01-29\\_iaml\\_ims\\_new-york\\_programme.pdf](http://www.iaml.info/files/annual_conferences/2015-01-29_iaml_ims_new-york_programme.pdf)

## 国際大会初参加者のための補助金

日本支部では「初めて国際大会に参加する会員で、IAML の活動に関心を持っている個人会員(非常勤講師等の研究者を含む)および団体会員となっている機関に所属する」方に対し、補助金制度を設けています。現在ニューヨーク大会に向けて募集中です。この機会にぜひ御応募ください。応募受付は 5 月 20 日まで。詳細は事務局長・長谷川までメールでお問合せください。yumikoha@mountain.ocn.ne.jp

## 『フォンテス』新編集長に J. カッサロ氏

機関誌 *Fontes Artis Musicae* 編集長 M. Buja 氏の後任に、Jim Cassaro 氏が決定した。本年 1 月付で就任しているが、氏編集のもとでの刊行は来年 1 月から。既に活動を開始しており、各支部にレポートの要請がある。

カッサロ氏はピッツバーク大学附属音楽図書館(Theodore M. Finney Music Library) 館長。同大学で音楽史を講じる音楽学者でもある。専門は 17 世紀のフランス音楽だが、音楽書誌学、18、19 世紀のイタリアオペラをも射程に含める。

## 国立国会図書館が音楽資料・情報に関する e ラーニングを計画

国立国会図書館音楽映像資料課では、ここ数年にわたる音楽資料・情報に関する研修セミナーの成果に踏まえて「遠隔研修」を計画中である。1 月 16 日、関係者に対する意見聴取会が開かれ、研修教材の構成を含めて論議された。館外からの出席者は、伊藤真理(愛知淑徳大学)、松下鈞(JCPO、明治大学)、林淑姫(IAML 日本支部)の各氏。

## 会員の異動

入会 澤田宏美氏

退会 森佳子氏 劉薇氏

## 会費納入のお願い

2015 年度会費を未納の方は、ご送金をお願い致します。

## 【編集後記】

昨年 12 月 10 日、遠山一行初代支部長が他界された。戦後の音楽界の発展に寄与された御業績の数々に、改めてその存在の大きさを憶います。接する人々の誰もが敬愛の念を抱かずにはいられない廉潔の、あたたかなお人柄でした。支部への長年にわたるご尽力に感謝し、謹んでご冥福をお祈り致します。(編集部)

Newsletter — 国際音楽資料情報協会日本支部

第 52 号

2015 年 1 月 30 日発行

国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部

〒171-8540 東京都豊島区南池袋 3-4-5

東京音楽大学附属図書館内

<http://www.iaml.jp>